コロナ禍の今、保育や子育てで大切にしたいこと

幼児教育アドバイザー　奥野みどり

コロナ禍で今起きていること

コロナ禍での保育者のマスク着用における保育場面の子どもの変化を調査した結果（七木田，2020）によると、保育者の 63.0%が子どもの全年齢において「反応が乏しくなった」と答えていました。具体的には「食事」場面では、“マスク越しに「モグモグ」と伝えても分からない”やって見せて、ようやくまねて口を動かす。「聴力」に関しては、どこの先生に呼ばれたか分からず、キョロキョロする。「読み聞かせ等の活動」では、マスク着用時の読み聞かせには興味を示さない子どもも、マスクを外して読み聞かせると、興味を示して最後まで座って聴くことができた等。これらの保育者の気付きは、咀嚼嚥下・聴覚機能・言葉の発達、そして表情による感情のコミュニケーション活動など多くに影響があるのではないかと今後の経過が気にかかります。また、地域においては、小児科診療所の受診数減が報告されています。感染症や怪我による受診が減ったことも背景にはありますが、病院での感染を恐れての受診控えは、疾病や虐待の早期発見に繋がらないことが危惧されています。

昨年度春の巡回相談の風景

昨年の全国一斉臨時休校に伴い、保育所等も登園人数制限により、通常の人数よりも少ない中で保育が行われました。その 6 月の巡回相談でのことです。例年であれば、年度が改まり子どもたちは新しい環境に慣れようと頑張っている時期です。時に落ち着かず、教室がざわついている様子も見られます。しかし、どの教室でも子どもたちが落ち着いて過ごしている姿が見られました。子どもたちの表情も満足そうに、私には映りました。「いつものこの時期とは違いますね。」との私の問いかけに、「人数が少ないことで個別に関わることができているからでしょうね。」との保育者の微笑みが印象的でした。

人と人がつながること

コロナ禍における新しい生活様式に慣れてしまうことの弊害が、いろいろと見えてきました。子どもは保育者との関わりから、人と人とがつながることで生まれる安心感や信頼感によって、子どもの新しい世界を拓き、それらが発達の出発点となります。そのつながりの大切さに、この執筆をとおして改めて気付くことができました。感謝申し上げます。園所の子どもたちや皆様にお会いできる日を楽しみにしております。